賀川豐彦著

# 病人慰安法

イエスの友 看護婦ミッション綱領

一 イエスに在りて敬虔なること
二 貧しき者の友となり勞働を愛すること
三 世界の平和の爲に努力すること
四 純潔なる生活を貴ぶこと
五 社會奉仕を旨とすること

# 病人慰安法

賀川豊彦

## 藥もきかぬ時がある

人間をたゞ細胞の塊とのみ考へてはならない、人間には神經もあれば、人格もある。所が今日の醫學が、唯人間を一個の機械のやうに考へて、精神の方を省ない所に、病氣を治す上に種々な故障が生じて來る。看護者が注意しなければならぬ點も、矢張この點であつて、病人をたゞ藥だけで治さうと思へば、大きな間違ひが起る。例へば効くべき筈の睡眠藥が、ある時には効いて、ある時には全く効

かぬ時がある。それは患者の精神狀態によるのであつて、患者の昂奮が激しければ、効くべき筈の藥が、全く効かないで濟む事がある。

そこである醫者は、患者の神經といふことを此上なく心配する。然し、普通醫者の考へてゐる神經は、人格的な考へ方ではなくして、生理的な考へ方なのが多い。私はそれに不贊成を稱へるものではないが、眞に病人を世話する者は、もう少し人間的に考へねばならない。

## 病人は赤ン坊である

病人は、病床に就いてゐる以上、特殊な事情に制限せられた發育不能の赤ン坊である、と考へて少しも差支ない。之を世話する者は病人を自由がきく成人だと考へるならば、非常な間違ひをする。赤ン坊が食事の世話から、尿の世話まで、他人にせられる如く、病人もまた同樣である。それであるから、世話をしてゐる者は、赤ン坊を世話してゐると同樣に、赤ン坊が泣き出さない前に、種々世話を見てやるやうに、氣を付けて、手廻しよく、次から次へ病人が退屈しない爲に、種々な面倒を見てやらなければならない。

## 信用第一

赤ン坊がいつも子守を必要とする如く、病人もまた世話する者が必要である。修養をつんだ病人であれば、別であるが、普通の病人であれば、いつも誰か確かりした者が、その傍に附いてゐる必要がある。重くなつた病人は、恥かしい處まで、人に世話にならなければならないから、普通はその人の、最も信用してゐる人、或は妻であ

るとか、親であるとか、兄弟であるとか――平素から極親しい者でなければ決して容さないことを、看護婦とか附添人には、喜んで容すのであるから、その點に對しては、飽く迄、病人の信用を得るやうにならなければならぬ。老練な看護婦は、患者に、信用を得るとが非常に上手である。その信用を得る方法は、患者の病床に近づいて、病人に必要な種々な設備、病人の安臥を助ける工夫等の手配りによつて、信用を得ることである。

私は小さい時から病身で、二十歳の時から肺病にかゝり、その後種々な病氣にかゝつた爲に、看護者の善惡しは看護者が病床に這入つて來て、僅か十分間のうちに、見究めることが出來る。よい看護者は自分の赤ン坊を抱き上げる母の樣に、病人の體溫から、呼吸の

具合、病床の狀態、睡眠の關係、食慾の模樣、其他病人の心理狀態まで委しく聞いてくれる。病人は、きかれる迄、なか〳〵云ひ度くても面倒臭くて云へないとが多いのであるから、きいて呉れることに依つてどれだけ嬉しいか知れない。

若い看護者は、さうした點迄注意しないで、たゞ羊を番する犬の樣に、病人の心理狀態も考へないで、たゞ氷嚢をとり變ること許りをすれば、よいと思つてゐるが、大きな間違ひである。そこは赤ン坊であるから、手廻しよくきいてやる親切を持たねばならない。然しその聞く方法にしても、要領よく、母が子供に對する樣な態度で、きび〳〵やつてゐなければならぬ。さうしなければ病人は、餘りの煩雜に厭氣がさして來る。

## 病人の心理の研究の必要

生理學、解剖學に委しい看護者でも、病人の心理狀態に就いて研究してゐる者は、眞に少い。それであるから折角病人を世話してゐても、患者も面白くなく、此方も面白くなくて、まことに不愉快な日を送ることがある。

第一に注意せねばならぬとは、病床の心理的境遇である。看護者は普通、衞生的な方面は考へるけれども、心理的の方面を考へる者は少い。例へば、光線がよく部屋に這入つて來ることは衞生上まことに望ましいことであるけれども、餘りに明るい部屋は、患者には禁物であつて、病人はさういふ所で、安靜に、氣を落付けることは出來ない。それであるから衞生的にのみ考へないで、心理的にも考へねばならぬ。部屋の壁などにしても衞生上から云へば、白壁にこしたことはないが、心理的に云へば、クリーム色や、青味がゝつた鼠色の方が、遙かに氣を落付かせるのである。それで西洋では近頃病院の壁をさう云つた風に塗つて居る。

その他、音響、臭氣、寒溫、氣流等の心理的方面から來る注意を充分にしなければならぬ。殊に都會にある私立病院等に於ては、病室を實に無理して造つてある爲に、心理的には全く零點を付けねばならぬ樣な狀態に置かれてゐるものが多い。さうした場合には、何か特別な部分をとらへて、患者に暗示的な慰安を與へる樣な方法をとらねばならぬ。例へば、比較的穢い病室に於ては、出來るだけ、綺麗に掃除をして、香の高い香水を患者の枕に塗りつけておくなら

ば、病者はそれによつて、他の不滿足な部分を忘れてしまふ。

## 會話と沈默の練習

病者との會話は出來るだけ簡單で、要領を得たものがよい、病氣に關することゝか、または、病人が要求することの外は、つとめて沈默を守る方がよい。その理由は、病人の心理と、健康者の心理の間に、非常な距離がある爲に病人に面白いと思つて話したことが却つて、病人をして悲しましめることがある。それであるから、病室に於ては、病人が話してくれと云ふことの外は、絕對的に沈默を守ることが必要である。この沈默の練習の出來てゐない人には、雜誌を見てゐても差支ない。然し、病人が、多少重い場合では、さうした雜誌も讀まないがいい。

## 發熱による心理的變化

殊に熱のある患者の如きは、各種の錯覺がある爲に、機嫌をとる意味で話したことが、恐ろしい錯覺を生んで、手の付けようのないことがある。私の聞いた最も悲慘な話の一つはある親切な看護婦が、冗談半分に、猫を縊れ殺した話をした所が、どうした間違ひか、看護婦が自分を縊れ殺すと云つて、死ぬ迄狂亂を續けたことがあつた。その看護婦と云ふのは、實に立派な看護婦で、私の常不斷から尊敬してゐた人である。これは病床で話してはならぬ殘酷な話を、病人に話した間違ひから起つたのである。

## 健康者と病人の心理的差異

之を見ても、病人を慰安する場合には、決してその場限りの態度

をとらないで、病人の心理狀態をよく考へ、全人的に慰安する心持を持つてかゝらなければならぬことを、吾々は考へさせられるのである。つまり、慰安する側に於ても、全人的な態度をとらねばならない。こちらが緊張し、注意力を旺盛にし、骨をしみをせず、患者の社會的位置や、富の程度等を考へないで、どんな貧乏な患者であつても、經濟問題を離れて眞の人間として愛し得る心持ちでかゝりいつも柔かな氣持ちで、純潔な態度を失はず、どんな小さい仕事をする場合でも、誠實さを以て、嫌な仕事でも喜んでするといふ奉仕的な態度をとるならば、必ずやその心持ちは病人に通ずるものである。會話をつゝしむことに就ては、已に述べた通りであるが、その態度に於ても會話以上の注意を必要とする。

## わざとらしくすな

それではどんな態度を病室で執れば良いか、始めて病人を世話する人は、病人をあまり病人らしく取扱ふことに失敗することが多い。即ち、看護する側に於ても病人に接すると思つて無理をなし出來ない犧牲を無理に拂つて見たり、病室に這入つても、わざと心配らしくしてゐる樣に裝うて、病人の氣を腐らせる樣な態度をとる場合には、その病室の空氣は自然重くなり、病人は悲觀し、看護してゐる者も自然疲れがはげしく、その看護にむらが出來、いざといふ場合に少しも間に合はぬことが多くなつて來る。それであるから、永い病人であれば、永いものほど、あまり、わざとらしくなく、極普通に、然もだれ氣味のない樣に、立ち廻るがよい。私は、病人らしく

取扱はれるのが、いつも不愉快でたまらなかつた。例へば、看護するといつて病人のベットの下に、蒲團も持たないで泊り込まれたりすると、その志は有難いけれども、寢てゐる病人は氣が氣でなく、その晩附添ひに來てゐて呉れる人の身の上を思うて、一晩眠られぬこともある。之等は實に、拙い病人慰安法であつて、わざとらしい看護は却つて病人の氣持ちを腐らすことを示す一つの例である。それであるから、病人を看護する者は何時も無理がない樣に、よく眠り、よく食うて、自分の正當なる判斷力と、注意力が鈍らない樣にわざとらしくない生活を病室で送らねばならぬ。言葉などでも、わざと小さい聲を出したり、わざと叮嚀な聲を出すことによつて、病人は何か異狀が自分の身體に起つて居ると思つて、却つて警戒することが多いのである。それであるから、極めて平靜に、あまり小さい聲や、わざとらしい態度をとらないで、極普通にするのが一番よい。

## 病室に於ける態度の美

最も望ましきことは其態度の美的であることである。病人は、みんな神經衰弱にかゝつてゐると云つても差支ない程度に異常な尖つた神經をもつてゐるから、平素であれば感じない色彩、輪廓、臭氣音響等が特別に目立つて感ぜられるので、病人に接する者は出來だけ普通の時より美しい態度をとる必要がある。

醫者が禮儀の正しい、又比較的美しい態度に出て呉れる程患者にとつて嬉しいことはない、看護婦又は看護人にとつても同樣である。

わざとらしい華美な姿はひかへねばならないが、看護婦などは、髪をきれいに結び、薄化粧する位のことは、いつも病室に於ける大事な條件として考へて置かねばならない。

## 病室に於ける快活なる態度

看護する者は常に快活であらねばならない。看護者の悲觀は、直ちに病人に傳染する。如何なる時でも、病人に濕つた顏を見せてはならぬ。例へ病人に同情した涙であつたも涙そのものを病人に見せてはならぬ。最も快活な姿を病人にみせて、その顏を見ることによつて、病人が病に勝ち得る精神を燃す樣に努めねばならぬ。それであるから看護婦の生活難や、家庭に於ける貧乏や、看護婦としての勞働の苦痛などを、決して病人に洩らしてはならない。私は拙著看護婦崇拜論に於て述べたやうに、看護することそのことが既に犧牲的の仕事であるから、それがどれ程苦しい仕事であつても、平氣を裝うて仕事にとりかゝらねばならぬ。この泰然たる態度が病人にとつて最大の慰安である。

## 母の如き態度

私は既に病人は赤ン坊であるといふたが、若し病人が赤ン坊であるとすれば看護者は母であらねばならぬ。母が赤ン坊を世話してゐる樣子をみるならば、看護婦がとるべき態度は凡て理解せられる。儼然たる確信と、慌てざる態度、いつもわざとらしくなく、嘗て骨惜しみをせず、如何なる犧牲に對しても平然として之に應じ、貧乏や涙を超越して、赤ン坊を可愛がつてゐるその母の態度こそ、看護

者が病人に對してとるべき態度であらねばならぬ。

女性は本能的に、この母性愛を産みつけられてゐる。其處に女性の偉大さがあるのであつて、男子には氣のつかない細かな點まで、女性には氣がつくのである。

## 宗教的であれ

以上云うて來たことを綜合して考へてみるならば、病人を慰安するものは、極强い人であらねばならぬ。只ほんの職業的態度や、通りがゝりの親切さで、病人を慰安してはならぬ。只一寸花を持つて行く位が、病人の慰安になると思つてはならぬ。それもよい。然し、そんなことで、病氣がなほるものではない。眞の病人の慰安法は、病人が病氣がなほる樣に、又少しの間でも、病氣を忘れる樣にして上げねばならぬ。その爲には、宗教的に慰安して上げるのが最もよいのである。口で云はなくても、その態度に於て宗教的親切な態度を以つてするならば必ず病人には徹底するものである。宗教的といつても病人の前で、宗教の宣傳だけをしてはならない、看護する人の態度が、その行爲に於て宗教的であるならば、口先での傳道以上に病人には、宗教がよく解るのである。イエス、キリストの弟子ヨハネが、「愛なきものは神を知らず、神は愛なればなり」、と云はれたのは此の點であつて、病人に親切な態度をとつて上げることそのことが宗教そのものゝ本質でなければならぬ。

以上私は、看護する者の態度を述べて來たのであるが今度は看護をして貰ふ病人の立場から如何なる方面に於て慰安が欲しいかを述

べてみたいと思ふ。

## 病人の立場

既に述べた通り、病人を慰安するには、只單に、生理的、衞生的、醫學的、方面ばかりから行くだけでは足りない。心理的に、慰安せねばならぬ。然し、心理的と云つても、病人は生理的の疾患から、苦しんでゐるのであるから、先づ最も、注意してやらねばならぬのは生理的方面から來る心理的慰安である。之を衣食住の三つに分けることが出來る。最初に考へねばならぬ點は病室の問題である。

## 病室の心理的要素

病室は、視覺の方面と、聽覺の方面と、嗅覺の方面との三方面からいつも病人の心理を注意してあげなければならぬ。勿論此の外に



も、寒溫、濕乾等の方面に就いて考へねばならぬけれども、最も大事なのは、先きにあげた三つの點である。視覺の方面に於ては五つの方面から考へてあげねばならぬ。即ち光線、色彩、輪廓、印象、眼の運動の五つの點である。私は永く眼を患つてゐる爲に、光線の關係が如何に、病人の神經を支配するかをよく注意して居る。誠に滑稽なことであるが、眼科病院の病室などでも、不完全な設備しかしてゐない。之等のことについて詳しく書く餘裕を持たぬが、大體に於て、重い病人程、排日性を持つて居る。それは重い病人程光線を見るのが苦しいのである。それであるから、病人が重くなればなるほど、光を少くとる樣に注意しなければならない。さうしなければ病人は落ち附いて室に居れない。蒲團の中に顏をもぐり込ます傾向が

ある。

色彩は、先にも既に一寸述べたが、病人の爲には、出來るだけ白色をさけるがよい。それは病人の心理を考へない人には一寸解らないが、氣を落ちつかす爲には、どうしてもクリーム色や暗綠色がよいのである。殊に植物の葉の色の如きは非常に病人の慰めになる。植物の花が病室に持ち込まれる必要のあるのは、全く色彩の變化を病室に與へる爲である。然し注意しなければならないことは、神經衰弱にかゝつて居る病人には、出來るだけ色彩の強いものを持つて行かぬがよいと思ふ。少し快方に向つた病人には、燃ゆる樣な赤い色、或は、紫色は非常に喜ばれるけれども、重病患者は、赤い色に一種の恐怖を感じることがあり得るのである。之は、蒲團の色の塲合でも同樣である。重い患者ほど色彩のない單一色を多く用ひる樣に注意して上げねばならない。即ち病が重くなると、色彩の判別をつけることが面倒臭くなるのである。然し少し輕くなると、何時迄も白いシーツばかりを見つめて居ることがいやになるから輕くなつて來ると共に、變化のある色彩の組み合せられた蒲團などを與へてげる樣にすればよいと私は思ふ。

室内の輪廓は出來るだけ柔かな、無限曲線の家具を選ぶがよい。あまり四角四面の直線は患者をしてあまり冷やかな感じを懷かしめる。その爲めに、カーテンの襞、生花の曲線、ベッドの圓味、看護者の腕の曲線美などはよく患者の目に這入るものである。注意してあげるがよい。花を持つて行つてあげる塲合でも、病の重い者は、

複雜な輪廓のあるものを省いて、單純な輪廓のものがよい。それが快方に向へば向ふほど、單純なものでは滿足出來なくなるから、複雜なものを選んで行つてあげると良い。私などはあやめの花辨の美しい曲線の上を何時間もつゞけてみつめて居たことがあつた。日本の官立病院の病室などではこの輪廓について考へられてゐないから看護者が出來るだけ何かの形の輪廓を病者に與へる爲に、努力しなければならぬ。風船玉でも何でも良い。赤ン坊にお母さんがおもちやを與へるのと同じ樣な氣持ちで、視覺的のおもちやを患者に與へなければならぬ。私は、病氣が少し快方に向ふと共に、いつも人形が欲しくてならない時がある。ニューヨークで患つたときなどは、枕許に、ドングリの實で造つた人形を數個並べて、毎日それを友達の樣にして喜んだことがあつた。之等は、全く輪廓と色彩による慰安であつて、その喜びを私は今も忘れることが出來ない。

印象的な繪畫、或は彫刻、さうしたものも非常に患者の慰めになるから努めて病室を飾る一つの條件としなければならぬ。只之も先に云つた色彩の條件を必要とする、即ち、重病患者の部屋には、出來るだけ單一な色彩と、昂奮しない程度のものでなければならぬ。宗教的な繪畫、或は彫刻は最もよい。

又視覺的に、注意せねばならぬことは、病者の眼の使ひ方を出來るだけ樂にしてあげる爲に、花を置く場合、額をかける場合など決して上目を使ふ樣な所に、置かぬ樣に注意しなければならぬ。病氣が重くなればなるほど眼の筋肉を動かすことがいやになる。それで

花を置く場合でも、額をかける場合でも、患者が眼を動かさないでも眼にとまる所に、置いてをく樣に注意しなければならぬ。例へば看護者が患者に話しかける時でも枕許に立つていはないで、いつも、足許よりものをいふ樣に注意するがよい。又、疊の上にねてゐる場合など出來るだけ跪づいてものをいひ、立つてものをいはぬ樣に注意しなければならぬ。立つてものをいふと患者は、上に目をあげて、餘計な勞力を使はねばならぬ。座つて物をいへば、看護者の顏は近くに見えて、何だか解りがいゝ樣な氣がするものである。又遠くでものを云はない樣に、出來るだけ近くに來て叮嚀にものをいふのがよい。之は患者の焦點をきめる能力が病が重ると共に弱つて來るから、その努力をさせない爲めに、近くによつて、患者に納得の行く樣に話すことを心掛けて置く必要がある。

## 病床の讀書と視覺の關係

永く病床に横つてゐて、發熱もなく、だん〳〵退屈を感じて來ると、讀書をしたくなるものである。そのときに、上を向いて、讀書をすると眼も手も、首もつかれて來る。さうしたときに、注意せねばならないことは、患者があまり讀書しすぎて生理的に疲勞を感じた後に嘔吐を催したり、めくらみが來たり、輕度の發熱を催したりすることである。此をなくさうと思へばどうしても、比較的完全な、讀書臺を與へ、時間を定めて、讀書をさせ、患者に疲勞を感じさせない程度で本を讀ませるがよい。知識慾のある患者は非常に讀みたがるから、無理に讀書させないと、憂鬱性になるから、疲

勞させない樣に、また視覺と手の疲れない樣に讀書させねばならぬ。

## 病人と音響

病室にとつて、最も、嫌なものゝ一つは雜音である。電車の響き廊下を走る音、入口のドアの締めたて、水道の音、之等の雜音を出來るだけ排除する必要がある。病室の前の谷川の響、雨の音、風の音、之等も病人にとつては非常に恐怖の感じを與へることがある。出來るだけ避ける樣にするがよい。病人にとつて、最もよい慰めは美しい發音と、美しいメロデーを聞くことである。私は東京語で話して呉れることが——それは別に意味のない言葉であつても非常に嬉しい氣持ちを病床に於て感じたことがあつた。音樂に就いても同樣である。此點に於ては、蓄音機も純粹の音樂ならば病人を慰めるのに力がある。只患者を昂奮させる樣な人情物の浪花節や、淨瑠璃琵琶歌などはひかえるがよい。オーケストラなども重い病人に聞かせてはならない。美しいセレナーデを、繰返して病人にきかせて居ると病人はねて仕舞ふ、ネンネコ歌をきかせても、病人は安心して眠るものである。病人は矢張り赤ン坊である。

然し注意せねばならぬことは、ラヂオの樣にオッカケツツカケ、パンパンパンパンダラリーに、ひびいて來る音樂は病人をして疲勞せしめるからひかへねばならぬ。之は、病人が喜ぶ友人の訪問の場合に於ても同樣である。病人が話したがつても、會話に休息を與へて、只その側に居つてあげる樣にすればよいのである。

## 沈默による慰安

では、沈默して病人を慰安する場合にどうするか。病人は既に會話に疲れた。あまり病人に永く話をきかせるのは惡い。そんな場合には、若しも病人が喜ぶなら病人の身體の何處かに接觸點を保つて——或は手を握るとか、或は足をなでるとか、ひたひの上に手をあてるかして、沈默を守つて居ればよいのである。病氣が重くなればなる程病人は赤ン坊に歸つて行くから、赤ン坊の心理と全く同じ樣に、觸覺を通じて、親愛の程度を增さねばならない。病人の眼もだんゞ疲れて來て見ることが面倒臭くなり、聞くことが煩はしくなり、辛うじて嗅ぐことゝ、さわることの二つが殘る樣になるから、重症患者には出來るだけ多く觸覺を通じて物語らなければならぬ。重い患者程足の先を多くもんで上げるならば、患者は喜ぶものである。

重い患者に限らず、如何なる者でも、血行のよくなる樣にしむけであげることは、非常な慰安であつて、醫者が許すならば、出來るだけ、輕症患者ならばシップ療法、水治療法、マッサージ療法、カイロプラクテック療法など凡て、血行をよくし、又神經の昂奮のおさまる樣な工夫をとるならば、患者にとつて非常な慰安になる。看護者は只衞生學のみ考へずに、かういつた實際的方法も練習して置く必要がある。

## 存在そのものが慰めである

病氣の輕い患者は、然し此の皮膚接觸を厭がるものであるから物をいはなくてもよい、雜誌を讀んで居てもよい。新聞を見てもよい。

其爲に長くゐて上げることだけで患者の喜びになるのである。六ケ敷くいふならば愛するものの存在そのものが一つの慰めであるから默つて來て、默つて座つて居ても病人の慰めになるのである。看護者が用事がなければ病室に居らなくてもよいと思つて出て行くのは全く此のあたりの心理をわきまへないからで、用事がなくとも、側で新聞を讀んで居てもよい、ついて居てあげるのがよいのである。それが慰めになるのである。此點にも赤ン坊の心理がある。赤ン坊は、親が側に居て呉れゝば安心して居る。病人は赤ン坊であるからかういつた點に特に注意しなければならぬ。

## 病人と嗅覺

病人程嗅覺に鋭敏なものはない。病室に匂の高い香料を備へることは、決して贅澤なことではない。病人はどうかすると單調になつて、面白くなくなるから或は視覺による變化をさせ、或は音響による變化をさせ、或は觸覺を、或は嗅覺を通じて、變化を與へなければならない。重い病人程、嗅覺を通じての慰安法をとる必要がある。

## 病人の被服問題

睡眠をよく與へる爲に、ベッドの條件を考へねばならぬ。私は病室の寢卷、夜具等について、非常に好きこのみをする傾向が出來ることを自分ながらをかしくいつも思つて居る。私は、健康な時には徹底的な簡易生活を實行して居るものであるが、病室であまり長くねてゐると、つい蒲團の重いのが氣になつたり、蒲團の中にある濕り氣が氣になつたりして、どうしても無理をいひたくなる。私は床

すれがして困つたほど、長く上むけに寢た經驗がある。病氣が重くなれば蒲團の重いことが氣になる。又シーツの肌さわりが氣になる觸覺の快感からでもなぐさめを得たいと思ふ爲であるか平素は考へないことを考へる樣になる。毛布が嫌になり、毛ばつたシーツが嫌になる。之等は、注意してあげねばならぬ點である。

## 病人の食餌療法

私は、今日の醫者が食物に對してもう少し注意を拂つて呉れるとよいと思ふ。大勢の患者を抱えて居る醫者は特別にさうであるが、さうでなくても常識のない、醫者は藥を與へさへすれば病氣が治る樣に思つて居る。それは大きな間違ひで、藥はたゞ單に、細胞の力を刺戟するに止るのである。近年藥餌療法が顧みられて來たのは非常に



意味のあることであるが、藥餌療法とても變化性を與へて病人が快感を感じて食慾を增す樣にしてあげねばならぬ。病人にとつての一つの慰安は食物にある。今日の多くの看護者は、病人の食物の調理法等を餘り考へて居らない。然し、此等は、積極的に研究して置く必要が大いにあると思ふ。重い患者ほど、果實汁等を或變化性を持つて、あたへるならば、非常に喜ぶ。葡萄汁、密柑の汁、等は香が非常に高くて、頗る病人の喜ぶものである。私は日本に於てもう少し病人の味覺、嗅覺を刺戟する樣な病人料理が發達し、病人を慰安する工夫が發達すればよいと思つて居る。味覺と云ふものは、苦味酸味、鹽味、甘味、石鹼味の五種類しかないもので、それも熱が出て來ると感じなくなる。只殘つてゐるのは嗅覺の差である。それで

あるから患者には、香の高いものを出來るだけ多く選んで與へねばならぬ。

## 觀念的慰安法

以上、私は、生理的方面から來る病人の慰安法を考へて來たのであつたが、更に私は感覺的方面からの慰安をも考へねばならぬと思ふ。先に述べた樣に、患者は、八九分通り病氣と共に神經が變化して來るから餘程注意してあげなければ一寸のことを氣にするものである。患者の感覺は、既に述べて來た樣に非常に鋭敏になつて居るからつとめて平靜を保つて行く樣に注意せねばならぬ。不快な感を起したり、恐怖心をいだいたりさせないで常に安らかな氣持で居れる樣な工夫をしてあげねばならない。新聞を讀んであげるのはよいが厭な犯罪記事などを讀んで患者を昂奮させてはいけない。新聞や雜誌を讀んであげる場合でも、つとめて宗教的なものを讀んであげるのが一番よい。出來るだけ、患者を興奮させない樣に、然し又一方には緊張味を破らさない樣にさせる必要がある。

## 死の話を避けよ

患者の前で死に就ての話は禁物である。患者が死に就ての話をしだしたときでも、必ず死に打勝つ力のあることを敎へることが必要である。患者が死を希望する樣になれば、その患者に死が近づきつゝあることを考へねばならぬ。私の知つて居る一人の患者は、死ぬ眞似をして居てそのまゝ死んで仕舞つた。

之を見ても解るが、凡て病氣に負ける樣な事は患者に云はぬが最

もよいのである。患者に向つて、常に病に打ち勝つ工夫を敎へ、元氣を出させ、必ず、昨日より今日の方が快方に向ひつゝあることを自信させる樣にせねばならぬ。

## 精神療法の由來

精神療法の由來は全く此處にあるのであつて、佛蘭西で云ひ出され、歐羅巴に廣まつてゐるクーエー療法と云ふのは、患者が昨日より今日は良いと自己催眠術を用ひて自分に暗示するのである。その効驗は實に著しいものであつてだん〳〵よくなつて行く。下手な精神療法は一大失敗をすることがあるけれども近代醫學と並行して病氣に打勝つ自己催眠の工夫を凝せる樣に仕向けるなら屹度成功するものである。屹度病氣に打勝つことが出來る。それで看護者は、精神療法の工夫を知らなくとも（宗敎的信仰のある人は精神療法の奥儀を心得たものと考へて差支ない）患者自身が確信を以て病氣に打ち勝つ樣な環境を造つてあげなければならない。即ち出來るだけ平靜に、出來るだけ快活に、出來るだけ緊張した氣持ちを持續させ病に負けたといつた氣持を與へないで、必ず勝ち得るものであることを暗示して行かなければならぬ。

## 病床の退屈とその敎治法

病氣もだん〳〵永くなると、患者は退屈を感じて來る。その爲にどうしても心理的な工夫をして患者の氣をまぎらす樣にして上げねばならぬ。それには、心理的な日課が必要となつて來る。即ち、病狀にさわらない程度で病床の日課を定めねばならぬ。一、起床、二

洗面、三、含嗽、四、診察、五、手當、六、治療、七、服藥、八、食事等は、定まつた生理的方面の日課であるが、心理的方面に於ても日課を必要とする。

## 病床に於ける心理的日課

先づ一日に於て、病狀に從ひ發熱の工合や呼吸、咳、疼痛等の關係を見計つて、それ等の時間を除いた他の時間で、退屈するものにはそれ〴〵の日課をあてがはなければならぬ。

病床の日課といつても、肺病のやうな輕症患者は、散歩も出來れば、多少の運動も出來るが、病床に長く寢て居ねばならない咯血患者、心臟病、脊髓病患者、或は、腹部を手術した患者の如きは運動が出來ないから、讀書をするか、瞑想するか、會話をするか、心理的遊戯をするか、午睡をするか、其他に退屈をしのぐ道はない。瞑想の工夫の出來る患者はあまり退屈を感じないが、瞑想の練習のない患者は、病床で多くじれつたがるものである。それで私は、瞑想の工夫の全然缺けてゐる患者に向つて、どうして日課を與ふべきかについて考へてみよう。

心理的に云つて、午前九時と、午後四時が最も大事なときであるそのときに患者に強い、病に打勝つ意志を與へる必要がある。それであるから、患者が最も、氣持のいゝ時、即ち、午前九時頃と午後四時頃は、出來るだけ、ざわ〴〵しない樣に讀書を僅かでもさせて上げるならば、非常によいと思ふ。午後九時以後は、心理的に於ても非常に險惡な時であるから面會は絶對にさけ、讀書をやめ、靜か

にして眠る樣に努力させねばならない。患者のうちには朝早くから眼がさめて、退屈で困つてゐるときがある。さうした時には、少しの間でも、書物を讀んであげるなら、非常に良いと思ふ。面會は、讀書の後、即ち午前十一時頃か、午後五時頃が最もよい。食事の後は讀書せず、暫く靜かにして、五分でも十分でも、休息或は眠らす樣にするのがよい。午睡は出來るだけ、長くとらす必要がある。

## 病人と心理的遊戯

午睡後、眼がさめたときに、讀書も嫌であり、面會も嫌な場合には、看護者は患者に遊戯を指導してあげればよい。遊戯もあまり頭を使ふものはよくない。然し肺病患者の樣に永く病床に寢てゐるものは、心理的遊戯でもしなければ、退屈で困るものである。そんな時には、幼稚園でする樣な、切り紙、折紙、紙細工、豆細工、造花等の遊戯がよい。猶その上に、將棋やチエカー、トランプ、碁、等をすることが出來るならば患者には非常な慰めになる。然し、之も先に云つた午前九時、午後四時の讀書時間、食後の休息等をのぞいた、極僅かの時間を是れにあてることにせねばならぬ。決して、それに時を過し、疲勞を感ずる樣なことがあつてはならぬ。疲勞を感ずれば、慰安が、却つて慰安でなくなる。

## 病床を道場として

瞑想の工夫に就ては、別に『瞑想の工夫』といふ私のパンフレットがあるからそれを參考にして貰ひたい。然し一口にいふならば、病床を道場として無念無想の練習をするのである。それによつて心

理的絶對安靜と休息が出來る。此の工夫をしらないものはいつもあはてたり、セカ〳〵した氣持ちで、病氣のなほりがおそい。腦といふものは、身體が休んでゐても、いつも動いてゐるものであるから腦の中まで休む工夫は、瞑想の工夫にある。瞑想の工夫を最初の間は、無念無想から初め、更に積極的に、精神統一に、及ぼして、ある思想の問題を解決する樣にすることも誠に必要である。然し、餘程強い人でないと『心行』としての瞑想は困難であるから、寧ろ休息としての瞑想をするがよいと思ふ。

## 病床に於ける讀書

病床に於ける讀書ほど有意義なものはない。然し、讀むべき書物は餘程選擇せねばならない。あまり六ヶ敷い書物を讀ませてはならぬ。出來るだけ慰安を與へ、病氣を癒すに都合がよい堅實さを持つた書物をすゝめるがよい。それには、臨時の間專問的書物を離れて宗教的な書物を撰ぶ樣に注意して上げねばならぬ。宗教的な書物でも出來るだけ、自然美を多く取扱つてゐるものがよい。日本の書物であれば、德富蘆花氏の「みゝづのたわごと」「新春」別所梅之助氏の「武藏野の一角に立ちて」「霧の王國」「山の雫」などがよい又宗教的な書物では「聖書」「口語譯大藏經」等を中心として、偉大なる人物の短かい傳記物がよい。小說類でも、出來るだけ健全な宗教的なものを撰ぶ必要がある。殺伐なもの、恐怖心をそゝるもの等は絶對にさけねばならぬ。此は新聞を讀むときなどにも看護者も患者も共に心掛くべき事柄である。性慾の昂奮をそゝるもの、或ひ

は抗爭心を高まらしめるものは絶對にさけねばならぬ。雜誌を讀む場合でも重いものはさけるがよい。隨筆物、藝術、旅行記等を加味せられた題目を撰んで讀むのが最もよい。詩集、發句集なども、非常によいと私は思ふ。あまり多くの書物をすゝめる必要はない。出來るだけ名著をすゝめる必要がある。病中に讀んだものは非常に感化を與へるものであるから、雜ぱくな講談ものや、三文小說をすゝめることはよくない。或書物は、それを讀むことによつて、恢復力を著しく速からしめる。私の知つて居る某伯爵夫人が、或宗教的な書物を讀んで、病床に於て信仰に入り、不治の宣言をうけたその病人が、殆んど耐え難い疼痛に打勝ち、遂に全快したことを知つてゐる。之は良書による感化力といつてよい。

## 營養不良と神經衰弱

永く病床に寢て居て、營養が不良になつて來ると平素は少しも神經衰弱にならない人が、一種のヒステリーに罹る傾向がある。此は男女にかゝはらず起る症狀であつて、私は假りに之を病床ヒステリーと云ひたい。即ち、平素少しも感じないことでも、病氣中には、それが非常に擴大視されて感じられるものである。一般に精神上の動搖のあるときには感じ易いものであるが、生理的變化が劇しくなると共に、精神的動搖もはげしくなる。その爲に、時によると、自殺をすら決行するものが出來て來る。大正十二年度に於て日本全體では約一萬三千三百七十七人ばかり自殺してゐるが、その中の約二割六分は病氣の爲に自殺をしたものである。此病氣の中には精神

病は全く含まつて居ない。之を見ても、病氣と、神經衰弱とは並行して起つて來るもので、若しも此の上に貧窮が伴ふなら言葉につくせない悲劇が起つて來るものである。そんなときには、努めて氣を靜かにさせ必ず病に打勝つ工夫があることを敎へねばならぬ。然らずして、只藥のみがなほし得るものであると敎へるなら、一日三回の藥を呑むときにはなほる樣な氣がするけれども、藥をのまない他の二十三時間は、退屈で、困つて仕舞ひ、藥の呑み續けにしなければならない樣な感じを起すものである。そんな時には、靜かにしてゐることそのことが、細胞を通じての癒しの力によつて漸次に癒されるものであることを確信せしめねばならぬ。殊にチブス患者のやうに一ヶ月以上も、腹部を動搖せしめないで橫臥しなければならない患者に向つては、橫臥することの中に、宗敎的意義を發見する樣な方法を敎へるのが最もよい。若しも、その精神的態度のとれる者であれば、もうその人にとつては、病床は苦痛でなくなり、九分の九まで病氣がなほつたのと同樣である。只問題は時間の差だけが殘つて居る。約二ヶ月すれば癒ると、見えざる未來を信ずることは、信仰の力を借りなければ患者に敎へることは出來ない。

## 病者と信ずる力

斯う述べて來ると私は自然を信ずる力を高調したくなる。病と雖も、大自然の不思議なる力によつて、再び恢復し得るものであることを、看護者も信じ、又患者も信ずることに、最大の慰安の力がある。生理的の慰安や感覺的慰安はその塲限りであるが、生命の髓に

まで徹する樣な信仰の力を病氣中に患者に植ゑつけるならば、患者は、病氣を通じて却つて神の大きな力に接し、一生を通じてゆるがない、大信念に徹底することが出來る。これに勝る慰安法はないのである。

然し信仰と云へば何でも彼でも信ずればよい樣に思ふことは間違ひである。私の云ふ信仰とは、神のつくりたまうた支配したまふた大自然に於て、一方に於ては神が進化の法則を通して世の中をよくしたまふと共に、他方に於ては、進化の止まつた病的なもの、或は退化しつゝあるいやなものまで、再び進化させ、再生させ、それを通じて更に一歩よき社會に移して呉れるといふ法則のあることを確信せねばならない。此力は生理的に現はれては、病氣の回復するこ



と、死亡に對して、子孫の增殖があり、苦痛をすら通じて、生命の保護がある樣になつて居ることを吾々は、確信する。又心理的に云へば、教育と、相互扶助と、犧牲を通じて、不具廢疾、無智無學なものをも、決して捨てない。完全とは行かなくとも、どうにかかうにかやつて行ける世界を再現し得るやうになつてゐる。又精神的に見れば、人の缺點を許し、罪人をも救ふ愛としてあらはれ、宇宙の本體なる神も、それを完全に許し得ると確信するに至つた宗教意識そのものが、全く神の再進化の本質であると考へてよいのである。宗教では、之を『救ひ』と云つてゐるが千九百年前、キリスト教の開祖、イエスキリストは、此の大きな救ひを確信して地上にあらはれたのであつた。彼は、宇宙の本體が愛であることを教へ、此の本

體即ち神は、見えざる所にも、見ゆる所にもはたらく愛、そのものであることを說いたのである。信仰とは此の宇宙の本體の愛を信じて、生理的にも、心理的にも、亦精神的にも愛によつて行動し、見えざる未來のことまで宇宙の愛を信じて今の悲觀を樂觀に代へ、決じて失望しない努力をつゞけるそのことを、私は信仰と云ひたいのである。『救ひ』と云へば何だか、お爺さんや、お婆さんの云ふことの樣にひゞくけれども、宇宙本然の愛を信じてその再進化の力にたより、自分もその愛を體驗して、突進する所に宇宙の、救ひの信仰——即ち再進化の努力が自分を通じて行はれてゐるといふことを確信する樣になるのである。私の信仰とは、此意味にしか他ならない。私がキリストを信ずるといふのも全くこの宇宙本然の愛を信じその愛を人間の生活に應用して呉れたキリストの體驗そのものを信ずるに他ならない。即ち私は此の永遠性の愛を信じて居るから、昨日や今日流行する宗教を信じてゐるのと違ふのである。キリストは此の永遠の愛を人間生活に完全にあらはして呉れた世界の最大の恩人であり、愛によつて人を救ひ上げた第一人者、救主であるといふことが出來る。然しキリストだけを救主として於て、吾々がキリストの眞似をしなければ世の中はいつまでもよくならない。即ち吾々が喜んで病人に接近し、精神的な負傷をも勞る氣持ちでなければそれ等の憐な人々は永遠に神の愛を感じることがなくてすむのである。

## 神の愛は吾々を通じて働く

此の宇宙の大愛につかり、キリストの精神を持つて自分の精神と

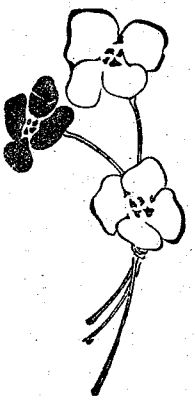
なし、私が生きてゐるのでなく、キリストが私のうちに生きてゐるといつた氣持ちで病室に坐るときに、其看護者の存在そのものが、キリストの代表者として、その病室を天國と化せないでは置かない。神の愛は彼女を通じて病人の胸にまで、注ぎ込まれる。十字架上に流した血は彼女のあつたかい血脈を通じて、病人の動脈に流れ込む。病人は、看護者を通じて、神の愛を感じ、病氣に罹つたことによつて却つて終生忘るゝことの出來ない、幸に出會すものである。

私は病中氣高い看護婦に慰められて一生强い幸福な生涯に這入つたといふ人達を澤山知つてゐる。三井慈善病院に一人の看護婦があつた。或貧乏な病める子供をつれた母が病院に入院した。母は貧乏である爲に病る子供を病院に放つて置いて、晝は勞働に出ねばならなかつた。それを世話したのは、熱心なキリストを信ずる看護婦であつた。然し看護婦はキリストのキの字も口には出さなかつた。然し病兒は親切な看護婦に抱かれて、母親が一日歸つて來なくても、喜んで、看護婦に抱かれて薄紙をはぐ樣にその病氣がなほつて仕舞つた。無邪氣な子供は何時とはなく、その看護婦より、祈りと讃美歌をおぼえ、母はその子供の祈りと讃美歌に感化せられて、貧乏の中に一生幸福な生活に這入つたといふことである。かうした出來事は小說以上の奇蹟的な出來事であるが、慈善病院等で働く看護婦に限らずどんなに、立派な貴族の入る病院に於ても起り得る出來事である。いくら金のある者でも、健康を害してゐるものは、非常に不幸な境遇に置かれて居る。若しもその不健康の上に精神的缺陷を持つ

ものは、寶にも金にも代へられない苦痛に出會してゐるのである。その悲劇の主人公をなぐさめ得るのは看護者の特權である。之に宗教のことを云はなくとも、その看護者の行爲が愛の結晶であれば、患者は退院した後に、その看護者の愛を通じて神を發見するであらう。さうした愛の生活こそ、病人にとつての最大の慰安であらねばならない。病人の中には、金と名譽にうき身をやつして嘗つて社會に奉仕したこともなく我儘と生意氣で、一生を送り、その爲めに健康を害して、病室に呻吟してゐるものもある。さうした者への藥は、醫藥だけでは駄目である。どうしても看護者の人格を通して、彼を精神的に救つてやらなければならぬ。醫者は一日に一回しか患者の手を握らない。然し、看護者は、一日を通じていつでも患者の脈を

とることが出來る。人格的感化からいふならば、看護者の感化は、醫者よりも、家庭のものよりも、多い譯である。此の機會を逸して彼を神に導く機會はないのである。即ち、病人への最大の慰安は、看護者を通じて、宇宙本然の愛を敎へ、その愛に生きて患者が一生涯生きて行くといつた風に彼の心をむけさすのでなければならぬ。此の永遠の愛を敎へることが、患者へとつて最大の慰安である。然し私は、繰返していふて置くが、此の永遠の愛を敎へるのは決して舌の上だけであつてはならぬ。看護者の行爲そのものを通じて敎へるのでなければならぬ。イエスキリストは「健かなる者は醫者の助けを求めず、只病めるもののみ之を求む。我は病めるもの罪あるものを招いてたすけるのである」と云はれたが、イエスキリストは永

遠の看護夫である。吾々は、彼を模範として、永遠の看護夫精神に生きなければならない。此處に、社會最大の慰安がある。



## イエスの友看護婦ミツシヨン設立に就て

イエスの友看護婦ミツシヨンは、イエスの友五綱領を遵奉する同志が看護婦の間に新らしい宗教運動を起さうとして、設立したものであります。

現在では、犧牲愛の結晶にも近い、看護婦の活動が割合に認められて居りませんが、私共は、尙一層の努力を以て看護婦自身の性格を高め、社會の蒙を啓いて尊重すべき看護事業の徹底を謀らねばならぬことを痛感します。延いて、私共は、看護婦が社會に捧げる如き献身的の愛を全人類が相互に注ぎ得る樣に鞭韃し合はねばならないことをも感じます。

全國にある六萬の白衣の姉妹に、看護婦生活の徹底に必要な智識と信仰とを提供することは、看護婦ミツシヨンの始の仕事であり、此の姉妹を通じて、日本教化の完成を期することは、永遠の祈であります。

斯くも看護婦ミッションは、看護事業の徹底と、日本教化の二つを目的として居ます。力の足りないもの同志の計畫であり働きでありますから、神の御導きゆたかなれかしとひたすらに念じて止みません。

一九二六年イエスの友看護婦ミッション

千葉しげ　坂本光子
河野喜久　前田みつ
那須ゆき　大坂とき
森山艷子　瀧澤光子
佐藤とう　長沼あき
松浦登貞　賀川豊彦
今井よれ　佐竹千歳
岩崎とみ

〔發起人〕

---

イエスの友看護婦ミッション
理事（承諾順）

賀川豊彦　大阪四貫島セツルメント總主事
吉田源治郎　東京基督教青年會宗教部主事
石田友治　ドクト
平田篤次　東京市立中野療養所醫長
村尾圭介　東京本所賛育會乳兒院長
河田茂　大阪回生病院長
菊池米太郎　女醫
芝八重子　女醫
林成子

以上

# イエスの友看護婦ミッション會則

第一章　名稱及事務所

第一條　本會をイエスの友看護婦ミッションと稱す

第二條　本會は本部を大阪に置き本部事務所を大阪市此花區四貫島大通三ノ七四貫島セツルメント内に置く

第二章　目的

第三條　本會は看護生活を通して基督の犧牲愛を鼓吹し且實現するを以て目的とす

第三章　組織及會員

第四條　本會は看護婦又は之に類似の業務に從事する婦人及本會の趣旨に賛同する者を以て組織す

第五條　本會々員を分ちて正會員、維持會員、の二種とす

第六條　正會員は看護又は之に類似の職業にある者にして本會綱領を遵奉し且本會事業完成の爲會費年額壹圓を據出する者とす

第七條　維持會員は本會の趣旨に賛同し其事業後援の爲年額壹圓以上據出するものとす

第八條　本會に入會せんとする者は其旨を本部又は支部、事務所に申込むもの

第九條　とす（脱會せんとする場合も之に準ず）
正會員拾名以上の地には支部を設置する事を得

## 第四章　事　業

第十條　本會は其目的を達せんが爲に左の部門を置く
一　編輯部　隔月「愛鑒叢書」及會報を發行し全會員に頒つ
二　教育部　研究會、修養會を開催す
三　共濟部　會員相互扶助の實行を期す
四　社會部　看護婦ホームを經營す

## 第五章　役　員

第十一條　本會に拾名以内の理事及幹事若干名を置く
第十二條　理事は本會事業の方針を決定し幹事之が統轄遂行の任に當る

## 第六章　維　持

第十三條　本會の經費は會費及一般の寄附金を以て之に充つ
第十四條　本會維持の狀況は毎年一回以上會員に報告す

## 第七章　附　則

第十五條　本會々則の變更は會員拾名に對し壹名の割合にて選出したる代議員會の出席者三分の二以上の承諾を得て之を變更するものとす

昭和二年四月二十八日印刷
昭和二年五月五日發行
昭和四年三月廿二日再版發行

『病人慰安法』
（定價一部金拾錢）

著作兼發行者　兵庫縣武庫郡瓦木村高木東口　賀川豐彦
印刷者　大阪市此花區四貫島大通三ノ七　吉田源治郎
印刷所　大阪市此花區四貫島元宮町一四　四貫島セツルメント出版部

不許複製

發行所　大阪市此花區四貫島大通り三ノ七
四貫島セツルメント内
イエスの友看護婦ミッション